

学生の思考と知的好奇心を導くための教材と授業法の工夫

理科教育講座・渡邊重義

1. 授業改善の背景

環境教育学概論は、生活環境コースの選択の授業であり、学校教育教員養成課程の教科または教職に関する科目にも位置づけられている。必修ではないが、2005年度の受講生は93名、2006年度は78名であり、中～大人数を対象とした授業として、教材や授業法の工夫を行った。ところが、本年度（2007年度）は、ほとんどの教員免許取得希望者が、同時時間帯に開講している図書館司書の資格獲得に必要な講義を受講したため受講者は28名であった。そこで、人数が減少した状況に応じた授業内容や方法の改善を行った。

2. 2007年度の授業改善と授業評価

授業は15回中の10回を講義、3回を環境プログラム作成の実習、最後の2回をプログラムの発表会に充てている。講義では、視聴覚教材の使用や様々な教材を提示することで具体例に触れてもらい、学生との双方向的なやりとりを通じて、授業中に思考場面をつくるように工夫している。本年度の授業では、人数が減少したため10回の講義の中の1回の内容を差し替えて、大学間バス内の環境調査を行う実習を取り入れた。

授業評価は最終回の講義において記名式の調査紙を用いて実施した。

3. 授業評価の結果

1) 思考の誘発

大学教育では、専門に関する知識理解や技能習得も目的にあげられるが、思考力の育成も重要な目的である。環境教育には多様な側面があり、意思決定など思考が要求される場面も多い。アンケート調査で、授業内容に関連して考える場面があったかを質問したところ、多かった：64%、何回かあった：36%、あまりなかった：0%、まったくなかった：0%であった。この結果は、2005年度の授業評価（n=82）とほ

とんど同じ結果であり、学生の思考を誘発するような試みはある程度成果を得ていると判断できる。しかし、少人数になったことにより双方向的な授業が行いやすくなったはずなので、もっと内容や授業の進め方を工夫する必要がある。

2) 知的好奇心の喚起

教育学部のカリキュラムにおいて環境教育関連の授業は特に体系化されていない。したがって、本授業での学びが学生自身で他の授業の学びにつながるように、知的好奇心が芽生えることを意識して授業している。アンケート調査では、講義が知的に面白かったかについて質問したが、学生の回答は、たいへん面白かった：72%、まあまあ面白かった：28%、あまり面白くなかった：0%、まったく面白くなかった：0%であり、2005年の結果よりも高い評価を得た。

3) その他

授業について学生に採点してもらったところ、平均点は87.6点になった。2005年度の85.4点のレベルを維持することができた。また、教材と講義の方法の適切さについて質問したところ、受講者全員から教材・講義の両方が適切であったという評価を得た。印象に残っている授業内容を質問したところ、最後に行った「環境プログラムの作成と発表」が最も多く、次いで「松山市のカラス事情」「フライブルグ市の取り組み」「動物園と環境教育」などがあげられた。1名ではあったが、「キャンパス内の環境調査」をあげている学生もいて、次年度につながる成果があったと考えられる。

4. 次年度の課題

現在のカリキュラムでは2008年度の受講者は2007年度とほぼ同数かあるいはさらに減少すると考えられる。人数が多いと多様な意見に触れることができるが、逆に人数が少ないとより双方向的な授業が行える。次年度は「双方向」を追究したい。